

ミツカン水の文化交流フォーラム2005 開催のお知らせ

リスクに強い水利都市

水循環がつくる21世紀の里<都市>とは

水害、地震、火災、温暖化 - 現代都市にはさまざまなリスクがあります。しかし現状では、個別の政策が功を奏し、高コストですが安全で快適と思われる都市環境が実現されてきました。その結果、いつの間にか都市の安全が当たり前となり、都市をメンテナンスする努力が忘れられがちになっています。一人ひとりが多様な形で存在する資源を、もっと身近に利用することで「里としての都市」が実現できるのではないのでしょうか。

水は、都市においてライフラインの一翼を担っていますが、都市水害等を引き起こすリスク要因であると同時に、消防水利・環

境水利といったリスクを緩和する資源でもあります。

多様な水利用によってかなえられる水循環は、単なる「都市の水環境整備」を超えて、「21世紀の里<都市>」の基本コンセプトの一つではないのでしょうか。

そこで、今年のミツカン水の文化交流フォーラムでは、リスク・安心・利用という3つのキーワードを軸に、健全な水循環をベースとした「21世紀の里<都市>」の姿と文化について、気鋭の論者に語っていただきます。

日時：2005年11月29日(火) 13時30分開演～17時30分 17時30分より交流会を開催

会場：草月ホール 東京都港区赤坂 7-2-21 草月会館内

地下鉄 銀座線・半蔵門線・大江戸線 青山一丁目駅より徒歩5分 地下鉄 銀座線・丸の内線 赤坂見附駅より徒歩10分

【テーマセッション】

これからの里<都市>居住におけるリスク回避の方向性

暮らしの民俗から将来を読む

菅 豊 東京大学東洋文化研究所助教授

リスク認知と合意形成

信頼と安心を阻害するダメなコミュニケーション

中谷内 一也 帝塚山大学心理福祉学部教授

夢ではない木造文化の水利都市

環境防災水利を活かした21世紀の都市再生

大窪 健之 京都大学大学院地球環境学堂地球環境学舎三才学林人間環境設計論分野助教授

都市の水循環と安全を守る水利

健全な水利都市は安全か？

沖 大幹 東京大学生産技術研究所助教授

【パネルディスカッション】

安心水利で21世紀の里<都市>をつくる文化とは

菅、中谷内、大窪、沖の4名によるディスカッション/参加者との質疑応答

コーディネーター：鳥越皓之 早稲田大学教授

【交流会】

参加者・発表者との情報交換

フォーラム参加の申し込みや詳細情報については、9月以降にホームページなどでご案内いたします。
なお、プログラム等、予告なく変更する場合がございます。予め、ご了承ください。

水の文化21号予告

特集「水蒸気 - 湿気と暮らす」(仮)

アジアモンスーンの日本

見えない水・すなわち水蒸気(湿気)とともに

に暮らし、ときには闘ってきたのが

日本の風土ともいえるでしょう

衣食住、産業の現場で

人は湿気とどのように関わってきたのか

水蒸気から暮らしを切ると

何が見えてくるのでしょうか



水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水との関わり」に焦点を当てた活動や調査・研究などをご紹介します。

ユニークな水の文化学習活動を行っている、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究を行っている、こうした情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。

すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

水の文化人ネットワーク 夏の登壇者

当センターホームページ・水の文化人ネットワークコーナー。

以下の方々を順次アップロードしています。

大窪健之 京都大学大学院地球環境学学助教授

中谷内一也 帝塚山大学心理福祉学部教授

矢守克也 京都大学防災研究所助教授

編集部より

本誌もやつと20号。今号よりページ数を増やし、オールカラーになりました。情報をできるだけわかりやすく、鮮明に伝えたいと願っての試みです。今後も、水の文化に関する新たな提案を続けて参ります。読者の皆様の忌憚のないご意見ご感想をお待ちしております。

編集後記

今号いかがでしたか？人の生死に直に接する消防士の方の志に触れ、心の中で拍手のプチ感動でした。消火の際に膨大な量の水を必要とすることを考えると、いつでも使える身近な水を意識することの大切さを痛感します。地震など非常時には消火栓も使えないことが多いので。(新)

日頃はなかなか意識することのない、縁の下の防火のしくみ。想像していた以上の多くがボランティアで支えられているのは、素晴らしいことである反面、ある種の危うさも感じる。一歩踏み込むと、思わぬ危険にも改めて気づく。これも新鮮な驚き。(福)

火事は誰かが消しに来てくれるもの。水は蛇口を捻ると簡単に出てくるように、簡単に無限に手に入るもの。そんな勘違いは捨て去らなければならぬ。防火についてもっと考え、水の恵みに感謝する事を学びました。そして、私達の生活は常に誰かに支えられている事も。(武)

火事と言って思い出すのは小学生の頃の記憶ばかり。消防自動車が出て来て校庭で消防訓練をしたこと。逃げ遅れないように上履きのかかとを踏まずに履くようにと担任の先生に言われたこと。隣家が火事で怖い思いをしたと従妹に聞いたこと。現実の火事についてもっと考えなくては。(ゆ)

河川、水道、生態系と、水を仕事にされている方は数多い。そんな方でも、消防水利にまで目配りするのは大変だ。巨大地震が起きると怖いなあと思いついたことは、自分で使える水がないとどうにもならないという都市の現実。日常は安全だけれど、自分で火を消そうと思うと、途端に安心感が遠のく。まさに安全と安心のミスマッチ。(中)

蛇口をひねると水が出て、スイッチで火がつくのは当たり前。家庭の電化が進めば、ガスの炎を見る機会までもが失われる。おまけに下っ腹に肉が付き、二の腕は脂肪ばかり。身近に汲める水があっても、このテイクアウトで果たしてバケツで水を汲み、走って行って火を消せるのだろうか。(賀)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第20号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

禁無断転載複写

発行日 2005年(平成17年)8月

企画協力 沖 大幹 東京大学生産技術研究所助教授
嘉田由紀子 京都精華大学教授 琵琶湖博物館研究顧問 水と文化研究会代表
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信 法政大学教授
鳥越皓之 早稲田大学教授

編集 秋山道雄 新美敏之 今井福生 武本知之 小林夕夏
辻美代子 中庭光彦 古澤実佐子 賀川一枝 賀川啓明

発行 ミツカン水の文化センター
〒475-8585 愛知県半田市市中村町2-6
株式会社ミツカングループ本社 広報室内
Tel. 0569(24)5087 Fax. 0569(24)6353
ミツカン水の文化センター 東京事務局
〒143-0016 東京都大田区大森北2-2-10・4F
Tel. 03(5762)0244 Fax. 03(5762)0246

お問い合わせ